九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[005]障害史研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/7172662

出版情報：障害史研究. 5, 2024-03-22. Society for Disability History Studies (Shōgaishi Kenkyūkai)
バージョン：
権利関係：

活 動 報 告

〔1〕科研メンバー

○研究テーマ

「障害の歴史性に関する学際統合研究　――比較史的な日本観察――」
（JSPS 科研費成果事業・基盤研究 A・JP19H00540）

○研究代表者

高野　信治（九州大学名誉教授）

○研究分担者

有坂　道子（京都橘大学文学部・教授）
大島　明秀（熊本県立大学文学部・教授）
小林　丈広（同志社大学文学部・教授）
小山　聡子（二松学舎大学文学部・教授）
鈴木　則子（奈良女子大学生活環境科学系・教授）
瀧澤　利行（茨城大学教育学部・教授）
中村　治（大阪府立大学名誉教授）
東　昇（京都府立大学文学部・教授）
平田　勝政（鎮西学院大学現代社会学部・教授）
福田　安典（日本女子大学文学部・教授）
藤本　誠（慶應義塾大学文学部・准教授）
細井　浩志（活水女子大学国際文化学部・教授）
丸本　由美子（金沢大学法学類・准教授）
山下　麻衣（同志社大学商学部・教授）
山田　嚴子（論文は山田厳子）（弘前大学人文社会科学部・教授）
山本　聡美（早稲田大学文学学術院・教授）
吉田　洋一（久留米大学文学部・教授）

○研究協力者

赤司　友徳（九州大学大学文書館・准教授）
末森　明夫（日本社会事業大学社会事業研究所・共同研究員）
クウィーラ・ダーヴィト＝ドミニク（David Dominik CHWILA）（九州大学大学文書館テクニカルスタッフ）
高久　彩（九州大学比較社会文化研究院・特別研究者）

〔2024年３月現在〕

〔2〕活動記録

○本科研・障害史研究会

・第11回研究会

2023年３月27日、オンライン開催

(1) 報告

藤本誠「日本古代の疾病・障害表現の基礎的考察――日中仏教説話集の比較を手がかりとして――」（年度末開催の研究会報告につき前号に概要未掲載）

〔概要〕日本古代における疾病・障害表現については、これまで八・九世紀については主に律令・令集解・『日本霊異記』など、特定の史料を中心に論じられ、また必ずしもそれぞれの史料的性格が考慮されていなかった。そこで本報告では、新たに活用できる史料を加えた上で表現についての基礎的な考察を行った。まず戸令目盲条とそれを反映した戸籍・計帳（A）の記述を検討した上で、『日本霊異記』・『日本感霊録』などの仏教説話集（B）、さらに法会の説法の手控えに関わる『東大寺諷誦文稿』（C）を利用して比較検討を行った。その結果、（A）と（C）から、日本古代においては、四肢などの身体的損傷による疾病・障害者が最も多く存在するとの認識が存在し、その次に「盲」の疾病・障害者が多いと認識されていた可能性が高いことを指摘した。その一方で（B）は、「盲」の疾病・障害者が多いことは（A）・（C）と同様であるが、身体性の疾病・障害が殆どみられず、また（A）と同様に精神性・知的な疾病・障害者が確認できること、皮膚疾患としての「瘡」の記述があることなどを指摘した。以上から、古代日本には多様な疾病・障害表現のあり方が存在したことが明らかとなった。つぎに、（B）に影響を与えたと考えられる中国仏教説話集は、六朝期から隋唐期まで一貫して「盲聾」（＋「瘖瘂唖」）と「癩」が悪報の象徴、あるいは発心の契機となるものとして代表的な疾病・障害であった。しかし古代日本の仏教説話集においては、話型・表現レベルで大きな影響を受けていたものの、「癩」の表現を積極的に受容していなかったことが明らかとなった。

報告後の質疑は以下の通り。河野勝行氏の古代障害史研究や氏による『日本霊異記』の位置づけについて。六朝期から隋唐期にかけての疾病・障害観の変化について、それと関わり七世紀段階の疾病・障害観をどう考えるか。癩と瘡の違いをどう考えるか、癩は子孫に繋がるという考え方があるか、また特に中世の身分制的・職能的なものと癩が結びつくのは、平安京などの都市周縁部で乞食が可能となる環境の成立と関わるのか。神道的・仏教的な疾病・障害観が神仏習合の展開によってどう変化するのか。近世・近代は精神障害への関心が強いが、古代は生産性・経済性・視覚性が重視され、精神的・知的障害への関心が低いとみてよいか。近世の人別帳などと古代の籍帳はどう異なるのか。

(2) 打ち合わせ（運営の方針・計画）

・第12回研究会

2023年６月17日、オンライン開催

(1) 報告

１、有坂道子「蘭学受容期における身体と疾病」

〔概要〕医書の検討を通じて、医療を提供する側の医師が身体や病・障害をどのようにとらえていったかを検討した。とくに、杉田玄白らの『解体新書』刊行後に本格的に導入される西洋医学の翻訳書あるいは編述書の表現に注目し、「常」と「変」あるいは「健康」という用語から意識の変化を追った。疾病を「変」と捉えることは変わらないが、「常」は「無病」ととらえる理解から、「康健」であるもの、と微妙に変化する。坪井信道の翻訳書『万病治準』では、「健康」は完全な無病に限って言うのではなく、たとえ小患や微恙があったとしても身体の機能を妨害するまでに至らない場合は、それもなお「健康」と説明される。この「健康」という用語の定義に恒常性の維持という意味を含めた緒方洪庵は、常調は欠くけれども著しく患害がないものを「帯患健康」と訳している。「常」や「健康」の意味内容は幅を広げながら変化してお

り、それに伴って医師の疾病観も変化していったと考えられる。

質疑では、報告前半で触れた眼科についてのほか、翻訳書を通じてそれまで認識されていなかった「変」＝病・障害が見出されていったのではないか、病因のとらえ方の変化はどのレベルまで（知識人だけなのか一般人も含めてか）広がる知識であったのか、など指摘・質問があった。

2、吉田洋一「江戸時代儒学者における荘子解釈」

〔概要〕本発表では、『荘子』徳充符篇に登場する「障害（者）」に関して、日本近世の儒学者がどのように思案していたのかを、亀井昭陽・帆足万里・毛利貞斎の『荘子』注釈書を瞥見し考察した。

荻生徂徠の学統である「古文辞」を、その思想形成過程に習得した昭陽と万里の注釈は、文章の換言や字義には優れているものの、現在われわれが認識している「障害（者）」という概念を持ち得ていたか否かという観点では疑問が残る。両者と比較して毛利貞斎の注釈は、他の中国古典の典拠をも参考にしつつ丹念な叙述が多く見られ、天から賦与された「生」は価値序列ができないほどの「至宝」という解釈が可能とすれば、当時の知識人の「障害（者）観」を検証するには好史料であろう。貞斎が参照したとされる林希逸『荘子鬳斎口義』と貞斎の注釈書（『荘子俚諺鈔』）との綿密な比較検証を行えば、江戸時代の「障害（者）観」を指摘することができるのではないか、と結論づけた。

質疑応答では、発表者が「現実世界における大小、長短、是非、善悪、生死、貴賤といったあらゆる対立差別の諸相が止揚され」と述べたことに対して、「『荘子』の思想もとで、『侏儒』あるいは『短小』は、どのような説明がなされていたのか」との質問があり、『荘子』本文の記述の有無も含め検討することを今後の課題とした。また徂徠学系の儒者だけでなく、国学者における『荘子』解釈の事例も調査する必要があるとの指摘もなされた。

(2) 打ち合わせ（運営の方針・計画）

・第13回研究会

2023年７月９日、オンライン開催

(1) 報告

1、鈴木則子「近世地域社会における座頭の医療活動～駿河国大宮町の事例から」

〔概要〕本報告は、幕末の駿河国富士郡大宮町に居住した佐野与一の日記『角田桜岳日記』を史料に、座頭初の一の医療活動の実態を明らかにすることを通じて、江戸時代の当道座に属する視覚障害者が、地域医療の重要な担い手であったことを論じるものである。また、初の一は広域的に当道座の勧化・配当の廻村活動を行うとともに、晴眼の妻子と「家」を形成して、五人組構成員としての役割も果たしている。初の一の共同体における立場はこのように重層的であり、ために彼に対する与一をはじめとする町方の人々のまなざしのありようも、またそこに規定されてくる。初の一と町方との関係性については、さらに今後の検討が必要である。

質疑応答では、本報告が前提とした加藤康昭氏が提起する「生活問題を基軸とする盲人問題に視点を置く盲人史」について、複数の参加者から補足的説明をいただいた。

2、小林丈広「戊辰戦争被災者と障害者」

〔概要〕管見の限り、近世の古文書の中に障害者の姿が描かれていることはきわめて珍しい。そこで、本報告では、近年整理が進んだ古文書の中から、その一端を紹介する。対象とする古文書は、幕末京都で種痘の導入に尽力したと伝えられる熊谷家の文書である。同文書には、天保の飢饉や大文字の送り火に対する支援、家業の筆墨製造に関わるものなど、多種多様なものが含まれるが、本報告ではとくに、幕末維新期の当主直孝が関わった鳥羽伏見の戦いの被災者に対する救済の記録に光をあてる。

慶応４年１月に起きた鳥羽伏見の戦いは、幕末の政変の帰趨を決する戦闘であったが、その周辺で多くの町人や農民が戦闘に巻き込まれて死傷し、戦火によって家屋敷を失ったことはあまり知られていない。熊谷家に残るのは、その際の被災者を町村ごとに書き上げた文書や死傷者に対する救済の記録である。かねて長州藩尊攘派の支援者でもあった直孝は、新政府側の有力町人として被災者

の調査にあたり、死傷者の家族に金穀を配付するなど救済の実務にあたったものと思われる。

本報告で注目したのは、そうした被災者の中に「盲」などとして障害者と思われる人々が散見されることであった。その姿は、砲弾を避けて逃げ惑ったり、戦場に跋扈する盗賊集団を追い払ったりといった被災状況の説明の中で言及されている。情報量としては決して豊富なものではないが、市井に生きた障害者をうかがうことができる、数少ない手がかりのひとつということができるのではないだろうか。

同家文書はなお整理の途上であり、その公開にはなお時間を要するものと思われるが、こうした機会にその意義を知っていただければ幸いである。

３、平田勝政「日本の優生学と障害者の人権」（資料報告）

『障害史研究　別冊』に論考掲載。

⑵ 打ち合わせ（運営の方針・計画）

・第14回研究会

2024年１月21日、オンライン開催

⑴ 報告

細井浩志「日本古代における「障害」「障害者」観に関する覚書」

〔概要〕本報告は、日本古代における「障害」「障害者」観の実態と形成・変化を、現代の定義をも踏まえ、先行研究と史料を検証しながら整理したものである。律令法解釈や特定の障害・障害者についてではなく、古代の障害・障害者の全体像を示そうとした点では、従来多くはない研究だったと言えよう。

最初に、律令に規定される三疾はほぼ現代の障害（障害者）に該当することを確認した。次に、仏教が因果応報説により障害を障害者の自己責任とする観念を持ち込んだことを、『日本霊異記』などを使って確認した。一方、仏教は障害者差別を助長したが、差別を積極的に推奨したわけではないともした。次に障害者への優遇措置である減免税の額と、当該障害者に可能な労働量の総計、障害者の扶養にかかる労力、そして障害者に支給される口分田の生産額などのバランスにより、周囲の負担が変わり、その結果、周囲の障害者を見る目も変わるという前提のもと、史料・説話に基づいて障害者差別の実態を考察した。そして障害者は個々の場面では差別されることが多いものの、社会認識や社会制度として差別されるべきものとはされておらず、そこには障害者の身内の財力や倫理感なども影響したとした。なお障害は在来の観念では、他の不幸と同じく神の祟りと考えられていた。ただし障害児は遺棄して当然との観念もある程度存在したとした。また癩者は古代においては追放または殺害されていた可能性を提示した。次に人口の多い京畿内では、貧窮者に混じって障害者も乞食として生存することが８世紀から可能であったが、それ以外の地域では、乞食は成り立たなかったのではないかとした。律令国家を支えていた郡司層の没落や気候変動の影響で、10世紀には律令制の貧窮者救済制度である賑給が機能しなくなる。それでも京畿内では権門が仏教行事の際に貧窮者への施行を行ったため、乞食の生存が可能であり、その数は増えていった。しかしその他の地域では障害者の生存は困難だったのではないかとした。また中世になると癩者を組織する非人集団や盲者の琵琶法師が登場する。特に前者は差別性の強い集団であったが、乞食ではあっても障害者（特に癩者）が生存できるようになった点で、あくまで相対的にではあるが、古代よりも状況が改善したと言えるとの見通しを示し、癩者差別が中世になって強まったとする説を批判した。

討論では、藤本誠氏より、律令国家以前の障害・障害者観について確認があり、続いて養老令や『令集解』諸説がどこまで古代の実態を示すかわからないこと、また史料上の「癩」がその他の重篤な皮膚病を含むと考えられることから、古代にあったとされる癩者差別がどこまで事実かわからないとの指摘があった。これに対しては報告者より、史資料的に不足するため、古代の癩者差別の実態は現状では上記の二様の可能性が考えられるとの回答があった。また藤本氏より『日本霊異記』の説話での個人の発言は社会通念を表すものではあっても、個人の意識を表すものとは必ずしも言えないのではないかとの意見があった。次に山田

嚴子氏が、前世で負債を抱えていると障害児が生まれるとの『日本霊異記』の説話のモデルが中国にあることを指摘し、中国の障害者観の日本への影響について質問した。これについては現在回答する準備がない旨の返答があった。また小山聡子氏より、10世紀以降、怪異に当たるような障害児は殺されているとの指摘があり、報告者がどう考えるかについて質問があった。これに対して、怪異とされるような特殊な障害児と、一般的な障害児とは区別されるのではないかとの回答があった。また中村治氏が、近代のハンセン病患者は、島に住んでも魚を捕るなどして何とか生存できた事例を紹介して、古代の癩者が島に追放された場合の状況について質問があった。これに対して、史料が少ないため実態は不明だとの返答があった。また樋原裕二氏から、報告者は河野勝行氏の研究を評価するような発言があったが、むしろ基調としては河野氏の視角とは真逆ではないかとの指摘があった。これに対して、河野氏のような階級闘争史観ではないが、個別の指摘には共感する点があった旨の回答があった。また山本聡美氏から『一遍上人絵伝』や『法華経変相図』における障害者の描写についての紹介があり、画像資料の活用の必要性が指摘された。

(2) 打ち合わせ（運営の方針・計画）

○学会報告

- 2023年６月３日、日本医史学会第124回学術大会、於・二松学舎大学、小山聡子「鬼子の誕生と怪異 ── 日本古代を中心として」
- 2023年６月４日、日本近世文学会第144回、於・日本女子大学、福田安典「没後二百年　大田南畝を語る」（シンポジウム）
- 2023年６月17日、金沢大学公開講座，於・金沢大学サテライト・プラザ、瀧澤利行「養生・衛生書のあゆみ②　中世篇」
- 2023年６月24日、比較家族史学会2023年度春季大会シンポジウム『家族と病い』、於・関西大学、鈴木則子「幕末の日記史料にみる「家」と看護」概要：江戸時代の家庭看護とジェンダーの関係について論じる。
- 2023年６月25日、第25回総合社会学会研究大会、於・日本大学商学部、瀧澤利行「日本における保養の文化と思想　──「鍛錬」と「愛護」の振幅と変容 ──」
- 2023年７月１日、説話文学会大会（六十周年記念大会）、於・早稲田大学、山本聡美「造形語彙集としての『釈氏源流』── 日本中世絵巻との接点を探る ──」概要：明代に版行された『釈氏源流』の図像の源流を日本の中世絵巻から分析し、特に「一遍聖絵」巻三熊野本宮における賦算場面が、『釈氏源流』下巻に載録される「少康念仏」と話型・構図に共通点があることを指摘した。
- 2023年７月９日、日本文学協会第42回研究発表大会、於・二松学舎大学、福田安典「三代目蜀山人・大八木醇堂」
- 2023年７月29日、日本仏教綜合研究学会2023年度例会、於・立正大学、山本聡美「監察するほとけ ── 中世閻魔信仰の嚆矢としての鳥羽炎魔天堂」概要：人間の善悪業を監察する尊格として閻魔を位置付ける論点を示した。
- 2023年９月２日、豪州日本研究学会、於・シドニー大学、山本聡美 ” Ruins as The Place of Awakening” 概要：経典見返し絵や法華経変相図に描かれた火宅図像を手掛かりに、中世絵画や文学における廃墟の表象と経説との結びつきを検討した。
- 2023年10月29日、日本近世文学会第145回、於・東北学院大学土樋キャンパス、福田安典「乃翁の東北行脚と『去来抄』故実編」
- 2023年11月５日、日本本福祉教育・ボランティア学習学会第29回新潟大会、於・新潟ユニゾンプラザ、瀧澤利行他「東京都内高等学校等教員のボランティア部活動指導に対する意識と考え方」
- 2023年11月11日、第26回精神医学史学会、於・東京医科大学病院９階臨床講堂、中村治「医師や役人から見た歴史と地域住民から見た歴史」概要：精神医療史について記録を残してきたのは医師や

役人であり、患者や地域住民が記録を残すことはほとんどなかった。その結果、事実の一側面しか知られないことになったのではないか。精神医療史は、医師と医療行政従事者と病院と医療技術だけの歴史ではなく、患者、家族、看護者、病院職員、地域の人の思いなども含んだ歴史であろう。そうであるなら、そういった人々もそれぞれの視点から記録を残し、これからの精神医療に関して有効な指針を与える歴史を構築する手がかりを増やすことが望ましいのではないか。

- 2023年11月11日、佛教史學會、於・佛教大学、山本聡美「発心の場としての廃墟 ── 三車火宅の図像学」概要：法華経絵画における「三車火宅喩」図像を手掛かりに、中世日本で絵巻や掛幅画に描かれる廃墟場面に、現世の移ろいやすさへの自覚を促し発心に導く舞台装置としての役割があったことを指摘した。
- 2024年３月23日　日本医史学会月例会、於・二松学舎大学（ハイブリッド）、鈴木則子「幕末地域医療と座頭鍼医」概要：江戸時代の当道座鍼灸医療についての研究報告。

○研究会報告

- 2023年９月22日、Center for Culture, Society and Religion, Workshop “Thinking Through Minshū Bukkyō: Popular Buddhism and the Study of Premodern Japan”（Princeton University）、藤本誠「Temples and Dō in Ancient Japan: The Roles of Powerful Local Families and Village Elites in Local Buddhist Facilities」概要：古代日本の地方寺院と村落の堂について、各地域で求められた社会的機能を果たしていたこと、寺堂での法会に関与した官大寺僧の説法により建立者の政治的権威を補強をする場であったこと、交通路沿いに建立された寺堂が律令制貢納交通を支える機能を有していたことなどを指摘した。
- 2023年11月12日、東国古代遺跡研究会第13回研究大会「東国の地域交流と平安仏教 ── 南東北と北関東の里の寺、山の寺 ──」、藤本誠「古代地方寺院をめぐる諸問題」概要：古代地方寺院の性格については、公的性格を認めるか否かで郡寺説と氏寺説が対立していたが、地方寺院における氏族の関与の在り方や仏教儀礼は国家の仏教政策と対立するものではなく融和的であり、地方寺院における国家的な仏教と地域の仏教は矛盾なく重層して存在したことを指摘した。
- 2023年11月25日、International Conference “Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia”（Tokyo Metropolitan University, Minami-Osawa Campus）、藤本誠「Statues and Sermons in the Local Community: Media Used by Buddhist Priests from the Capital in Ancient Japan」概要：古代地域社会における仏は、抽象的な仏教学的な理解よりも、釈迦の伝記や仏像を通して受容された結果、仏像そのものを生きた存在として捉えていた可能性があることを推測し、『日本霊異記』にみえる叫び声をあげる仏像説話群はそのような仏教受容のあり方を反映したものであることを指摘した。
- 2023年12月17日、鈴木則子「医療とジェンダーの歴史研究会　第１回シンポジウム」主催者として開催、於・奈良女子大学（ハイブリッド）
- 2024年１月20日、2023年度第２回早稲田古代史研究会、藤本誠「古代地方寺院の特質」概要：古代地方寺院の特質について、複数の地方豪族の関与、地方寺院の法会で語られた「先祖」の意味、地方寺院の仏教儀礼及び稲の出挙・酒の貸付からわかる勧農機能などの諸側面から考察し、地域社会から求められていた諸機能を有し、地域社会を体現する存在であり、地域社会の秩序維持や統合とも深く結びついていたことを指摘した。
- 2024年１月28日、国際日本文化研究センター共同研究「ソリッドな〈無常〉／フラジャイルな〈無常〉 ── 古典の変相と未来観」研究会、於・国際日本文化研究センター、小山聡子「中世における狐憑きとその治療」概要：中世における狐憑が中国思想の影響を強く受けている点を指摘した上で、どのように治療がなされたのかを発表した。

○講演

- 2023年５月20日、就実大学吉備地方研究所講演会、於・就実大学、小山聡子「古代・中世の病気治療 ── 見えないモノとのたたかい」概要：古代から中世にかけて、モノノケや鬼といった病をもたらすモノにどのように対処したかを講演した。
- 2023年６月６日、唐招提寺開山忌舎利会記念講演会、於・唐招提寺東室僧坊、山本聡美「中世戒律復興と東征伝絵巻」概要：中世戒律復興と非人救済活動に着目した講演を実施した。
- 2023年７月１日、2023年度佐保会愛知支部総会講演会、於・名古屋マリオットホテル、鈴木則子「江戸の暮らしから見た感染症との「共生」」概要：江戸時代の急性感染症に対する人々の対応について講演する。
- 2023年７月22日、2023年度久留米大学公開講座、於・小郡市埋蔵文化財調査センター、吉田洋一「江戸時代の街道と宿場 ── 長崎・秋月・薩摩街道を中心に ── 」概要：北部九州地方の街道の概要を解説した後、現福岡県小郡市域の旧宿場（松崎宿）や久留米藩松崎陣屋などの解説を行った。
- 2023年９月15日、於・愛媛大学俳句・書文化研究センター、福田安典「空海と平賀源内」
- 2023年10月７日、第117回歴博フォーラム「陰陽師と暦」、於・国立歴史民俗博物館講堂（千葉）、細井浩志（公開講演）「陰陽師の誕生」
- 2023年10月21日、京都女子大学宗教・文化研究所「仏教文化講座」、於・京都女子大学、小山聡子「中世における臨終行儀と往生際の迎え方 ── 親鸞の往生際の文化史的背景を中心に」概要：親鸞の往生際の歴史的背景について講演をした。
- 2023年10月27日、医学中央雑誌創刊120周年記念講演、オンライン、鈴木則子「江戸の暮らしと感染症」概要：江戸時代の主要な感染症と医療・救恤の問題について講演する。
- 2023年10月29日、Brain science meeting in Awaji（関西医科大学医学部精神神経科学講座主催）、於・ホテルアナガ、山本聡美「声なき声をきく ── 中世美術における病者の表情、しぐさ、関係性のあわい ── 」概要：中世絵画に描かれた病者や障害者の表情やしぐさから読み解かれる人間関係を分析する講演を実施した。
- 2023年11月12日、切目王子跡国指定記念講演、於・切目小学校体育館、小山聡子「熊野信仰と切目王子」概要：和歌山県日高郡印南町の切目王子は、熊野参詣道における重要な王子である。2022年に国指定の史跡になったことを受けての記念講演であった。古代・中世における熊野信仰で、切目王子がどのような意味を持ったのかをテーマとして講演をした。
- 2023年12月８日、於・愛媛大学俳句・諸文化研究センター、福田安典「愛媛の俳諧について」。
- 2023年12月16日、阪神中哲談話会第406回例会（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所漢字学研究会、科研基盤Ｂ東アジア漢字文化圏の疾病・疾病観の史的・現代的展開：鬼系病因論の起源と思想的水脈）、於・関西大学千里山キャンパス、小山聡子「鬼による病気とその治療 ── 日本中世を中心として」概要：中国における鬼と病気の関係を踏まえたうえで、日本におけるその展開について講演をした。

○講座

- 2023年７月８日、北九州市立自然史・歴史博物館歴史友の会開催講座、於北九州市立自然史・歴史博物館、高野信治「神になった武士」概要：病気治癒の信仰がある加藤清正などをはじめとする神格化された武士をめぐり話した。
- 2023年８月31日、令和５年度中津市アーカイブズ講座、於・新中津市学校、吉田洋一「中津藩の学問と教育」概要：江戸時代までの日本儒学を概観し、中津藩校・進修館創立前後の状況、関係する学者の事績などを解説した。
- 2023年10月17日、令和５年度久留米市内単位互換協定校による「共同講義」、オンライン、吉田洋一

「久留米地域の医学と九州医学専門学校」概要：江戸時代の医学と久留米藩医の事績を概観し、明治時代の医学教育、九州医学専門学校（現久留米大学）創立の経緯について解説した。

○展示企画

・2023年９月29日～11月26日、神奈川県立金沢文庫「特別展 廃墟とイメージ――憧憬、復興、文化の生成の場としての廃墟――」。企画参加・山本聡美。

概要：本科研による研究成果も一部盛り込んだ展示内容を実現できたので、ここでは障害史研究と関わる観点について触れておく。展示室は以下の五章構成とし、特に第３章では病や障害を抱えた身体を「廃墟表象」と関連付けて取り上げることで、障害と宗教的発心の関係を視覚的に浮き彫りとすることを試みた。

第１章　廃墟としての金沢文庫
第２章　廃墟の表徴――顕れる古代・廃墟を訪ねる・廃墟に潜む・栄枯盛衰
第３章　廃墟と発心――火宅・富と執着・遁世と遊行
第４章　復興の機縁としての廃墟――南都焼討と復興・「あるべき姿」として描く
第５章　鎌倉の興亡――武家による寺院復興・夢窓疎石の遺跡

一階展示室内に金沢文庫とゆかりの深い鎌倉幕府滅亡直前の元亨３年（1323）に描かれた「称名寺絵図」と江戸時代の「江戸名所図会」を並べることで、往時の繁栄と江戸時代には畑となった文庫跡の両方を視覚的にたどることができる。展示全体の基調を示すような導入部分を経て二階展示室に足を踏み入れると、真っ先に目に入ってくる正面ガラスケースが圧巻であった。前期には「法華経曼荼羅」（静岡・本興寺蔵二幅、富山・本法寺蔵二幅）、「六道絵」（滋賀・聖衆来迎寺蔵二幅）、「二河白道図」（香雪美術館蔵一幅）を掛け並べることで、大画面仏教説話画における図像交流を目の当たりにすることができた。すなわち、法華経絵における火宅表現、六道絵における人道表現、二河白道図における迷いに満ちた人間界の表現には密接な図像上の関連が見出される。また同じ展示ケース内に永仁２年（1294）に著された安居院澄憲による『法華経釈』（称名寺蔵）、承久２年（1220）に書写された『往生要集釈』（原本は法然撰述）などの注釈書を展示することで、中世仏教説話画と仏典や論書の注釈活動、また僧侶による説法が深くかかわっていたであろうことを示唆した。この導線の延長線上に「病草紙」を展示し、法華経絵や六道絵の文脈上にこの絵巻を並べることで、病や障害を得た身体を廃墟的なものとして捉え、さらには発心の契機として位置づけ得る視点を提示した。

○調査

・大島明秀、熊本博物館蔵草野幸次コレクションの調査。草野幸次が蒐集した和本と器物について調査を行い、仮目録を作成。和刻本が多いものの、清代の唐本が数点認められた。

〔3〕研究短報

○有坂　道子

『障害史へのアプローチ』の拙稿中で取り上げた医者の診療記録に、枝指・駢拇の子供を扱った弘化元年（1844）の治療例が２例挙げられており（正橋剛二、1993、「『方意便蒙』――高岡長崎家収蔵の神農講の記録――」『医譚』復刊64）、「丈夫ハ恥ヘキ筈ナケレドモ常人ハコレヲ愧ジテ療ヲ乞イ来ル者少ナカラズ」と枝指・駢拇の診療を求める者が多かったことを記している。この２例を見ると、枝指の子供は産婆の指示で指を括っていたため切断後順調に治癒し、後になってこの産婆の処置と類似の治療法が西洋外科書に載っていることに気づき、治療の実際が暗に符合していることに感じ入った所感を残している。一方、駢拇の子供は他にも疾患があったため治療開始を遅らせるよう諭したが、母親は「たとえ治らなくても切ってもらえば安心する、死んでも構わない」とまで言い、医者もやむなく手術に踏み切っている。母親の発言は、子供本人よりも、他人や社会からどう見られるかを強く意識したもので、医者もまた適切な時期に適切な医療を行うという医者としての判断より母親の要求に応じた社会的判断を優先している。母親（「常人」）、医者、（ここではないものとされている）患者、それぞれの意識のあり方を考えさせられる一例であった。

○大島　明秀

当科研での研究を含む、これまでの研究が評価され、第82回西日本文化賞・奨励賞（学術文化部門）を受賞した。

熊本博物館に収蔵される草野幸次コレクションを複数回にわたって調査してきたが、次年度も調査を継続し、目録を完成させ、発表する予定である。

○小林　丈広

学生の協力を得て、障害史に関わる史料収集や年表づくりを行った。また、関儀久『感染症と部落問題』（福岡県人権研究所、2022年）の書評を依頼されたので、執筆した。

○小山　聡子

- 本科研の報告書に論文を執筆した。
  小山聡子「日本古代・中世における障害児の処遇」障害史研究会編『障害史へのアプローチ』（2019～23年度科研成果報告書・障害史研究別冊、2024年３月）
- エッセイ「親鸞の結婚――玉日姫伝説が示すもの」を『佛教タイムス』2987号（2023年５月）に書いた。
- 講演録「鬼にされたものたち～闇の古代・中世史」が『浅草寺 仏教文化講座』67（2023年８月）に掲載された。
- 今年度は、鬼子を含め、鬼に関するメディア取材を受けた。「特集「災いも、疫病も、嫉妬に苦しむ女性も…都合が悪い事はぜーんぶ鬼のせい？ 鬼と日本人の歴史特集」（TBS ラジオ アフター６ジャンクション）、「多士才々「呪術史研究の小山聡子さん 鬼を通して日本人を読み解く」（『静岡新聞』2023年５月25日。共同通信の記事）、「鬼はなぜ角に虎柄のふんどし？」（NHK E テレ 漢字ふむふむ、2023年８月15日）など。
- 『朝日新聞』朝刊文化面に、2023年８月から2024年３月末まで（木曜隔週）、連載コラム「小山聡子の鬼の居ぬ間に」を執筆した。

○末森　明夫

【査読学術誌】

- 末森明夫（2022）「日本手話にみる指漢字と表語音節語：超拡張記号図式と圏論による形訳・義訳・音訳機序の記号論的考察」『手話学研究』31（1）：1-21.
- 末森明夫（2022）「手話辞書学の構築における記号論的接近法：「日本語→日本手話・対訳辞書」の記号図式と記号過程にみる換喩的描写と提喩的一般化」『手話学研究』31（1）：22-34.
- 末森明夫（2023）「『一般言語学講義』原資料にみる聾唖文脈の今日性：聾唖者の言語（ランガージュ）にみる歴史的時間・物理的時間・伝統的時間」『手話学研究』32（1）：1-25.
- 末森明夫（2023）「手話構文と mouthing の共起に関する記号論的考察：超拡張記号図式、triangular semiotic model、および translanguaging における mouthing の形式と意味の位置づけ」『手話学研究』32（2）（印刷中）.

【予稿】

- 末森明夫（2022）「指差構文にみるオシツオサレツ表象」『第48回日本手話学会大会予稿集』.
- 末森明夫（2023）「Deleuze=Guattari 言語観と手話記号論の接続に関する予備的考察：手話構文と口真似の共起にみる Markov 連鎖と再領土化」『第49回日本手話学会大会予稿集』.
- 末森明夫（2023）「近世日本手指符牒【目出度い】と現代日本手話【おめでとう】の間にみる通時音韻論的変化」『ろう教育科学会第65回大会予稿集』.

【記事（査読無）】

- 末森明夫（2023）「『御府内備考』「四谷塩町二丁目唖十五郎」」『聾唖史会報』74：27-28.
- 末森明夫（2023）「山住才三編（明治11年）『明治美譚：小学口授』「聾唖にして能く職業を励み且つ老母に孝ある髪結職の事」にみる孝子系譜聾唖伝文」『聾唖史会報』74：29-30.
- 末森明夫（2023）「邦訳書『仏国学制』第３編巻５（明治９年）「第５目 瞽者聾唖を教育する事」にみる聾唖語彙」『聾唖史会報』74：31-34.
- 末森明夫（2023）「刑法と治罪法にみる聾唖語彙」『聾唖史会報』74：35-39.
- 末森明夫（2023）「中村不折と聴覚障害：聾偉人主義と聴覚情報処理障害」『聾唖史会報』74：40-42.
- 末森明夫（2023）「書評　久保佐知恵・安河内幸絵（2023）「木米という文人について：木米の前半生の再検討」『図録没後190年木米』サントリー美術館：19-23.：聾米の失聴時期および意思疎通手段に関する遡及的類推」『聾唖史会報』75：10-14.

○鈴木　則子

- 鈴木則子「江戸文化と男性同性愛」山口みどり、弓削尚子・後藤絵美・長志珠絵・石川照子編『論点・ジェンダー史学』ミネルヴァ書房 2023年６月（ISBN: 9784623093502）
- 三成美保・小浜正子・鈴木則子編『「ひと」とだれか？』（『〈ひと〉から問うジェンダーの世界史』第一巻）大阪大学出版会、2024年１月
- 鈴木則子「近世大坂の庶民医療を支えた女性医療従事者たち」『Tehamo てはも』森ノ宮医療学園出版部、2024年２月
- 鈴木則子「幕末の日記史料にみる「家」と看護～看護とジェンダーをめぐって」田間泰子・土屋敦編『家族と病い』法律文化社、2024年３月
- 鈴木則子「翻刻『虎狼痢治準』」・「『虎狼痢治準』解説」、適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会編『緒方洪庵全集』第三巻、大阪大学出版会、2024年３月

○高久　彩

・2023年度は、明治の神祇行政で重要な役割を果たした福羽美静（1831～1907年）の身体に注目し、「痼疾の士」と称された彼の生い立ちを概観した上で、福羽の身体に関する福羽のオーラル・ヒストリーと他者の叙述を比較考察しつつ、福羽の身体に係る自己理解と他者理解の異同を通じて、福羽本人の身体イメージとそれと密接に関わる心のあり方、それを支える社会規範を明らかにすることを目指した。この検討を進めるため、武庫川女子大学附属図書館と西宮市立図書館で資料調査と収集を行うとともに、西宮神社と広田神社に加えて、京都の霊山護国神社 霊山歴史館を巡検した。

・日本文化政策学会の第２回学会奨励賞（論文の部）で、拙稿「明治４年太政官布告の『古器旧物』分類の特質 ── 博覧会と神祇行政の関係性に注目して ──」（日本文化政策学会編『文化政策研究』第15号（2021年度））が受賞作に選ばれた。拙稿は、本来あった場所から切り離して集積された「もの」の集合体とその分類を分析の対象としながら、従来の研究において文化財保護法の端緒とされてきた明治４年（1871年）の「古器旧物」に関する太政官布告とそこに示された「古器旧物」の分類の特質を明らかにすることを試みた論考である。

○高野　信治

障害史研究のビジョン提示に相当する拙文を２編草した。一つは、第38回歴史学入門講座（大阪歴史科学協議会主催）で講演した内容記録にあたる「障害史研究の可能性」『歴史科学』255号、2023年11月である。本講座はとくに若い歴史学徒や一般市民にも聞いてもらう場で、二名の参加記も寄せられた（大橋咲菜「歴史学入門講座参加記」、下内大輔「「障害史研究の可能性」を聞いて」）。本科研のテーマが歴史関係の学会、とりわけ若い方々に認知される一つの階梯になればと願う。今ひとつは、研究史をトレースした「障害史研究をめぐる覚書　── 通史・総合史・生活史 ──」『障害史研究』５号、2024年３月。古代から近代までの多様な障害史にかかわる成果を整理した。焦点拡散で非生産的との誹りも想定されるものの、障害が現代的な問題ゆえに、その歴史解析の様々な成果への目配りは必要と考える。

また、これまで進めてきた障害史に関わる近世近代の研究文献目録を完成させた（『障害史研究』６号、2024年３月掲載）。上記の論考２編はこの作業の成果といえる。さらに拙稿「石門心学道話にみる〈障害〉の比喩化：狂言台本の題材化との比較」『九州文化史研究所紀要』65号、2022年３月を踏まえ、「人のあり方を問う〈障害者〉　── 狂言と比較した心学道話 ──」を、障害史研究会編『障害史へのアプローチ』（『2019～23年度科研成果報告書・障害史研究別冊』、2024年３月）に執筆した。

ほかに以下の仕事がある。

〔単著〕『藩領社会と武士意識』思文閣出版、2023年７月、296頁（ISBN: 9784784220557）

〔小論〕「知行論からのささやかな展望」『鴨東通信』117、2023年９月

〔解説〕「藤野保『徳川幕閣』を読む」『読みなおす日本史　藤野保著「徳川幕閣　武功派と官僚派の抗争」』吉川弘文館、2024年２月

○瀧澤　利行

１）木嶋葉子，石原研治，渡邊雅彦，竹下智美，瀧澤利行「外国人児童生徒等に対する校内連携における教員の意識 ── 茨城県内の小中学校教員への質問紙調査から ──」，学校保健研究，第65巻２号，2023年７月，80-89頁.

○中村　治

〔雑誌論文〕「精神疾患を有する患者の生活支援と治療の場としての地域」、『精神医学史研究』vol.27, no.2、2023年11月、pp.64-72。

〔書評〕大塚公一郎著『病いのレジリアンス ── ナラティヴにおける虚偽主題 ──』、金剛出版，東京，2023年についての書評（『精神医学史研究』vol.27, no.2、2023年11月、p.124）。

○東　昇

・『近世障害者関係史料集成』の掲載史料の偏在から、近世障害史料の基礎となる刑罰・孝子褒賞・随筆・触史料を調査対象とした。①刑罰関係 ── 長崎奉行所「口書集」「御仕置伺集」、長崎代官記録集、②孝子褒賞関係 ── 幕府の「続編孝義録料」丹後・丹波、伊勢「勢陽善人録」、江戸「忠孝誌」「生野銀山孝義伝」「土佐国鏡草」から、本研究に関連する資料の目録を作成した。また、これまで調査した41件の史料を再確認し2503点の「近世障害史料目録」、凡例を作成し、データ集として『障害史研究』６号（2024年３月）に掲載した。

・近世各地の孝子褒賞史料・刑罰記録から障害・病表現を収集した上で、障害表現の変化、文書の編纂過程による統一などを検討した。刑罰記録が長期的に存在する対馬藩・長崎、孝子伝の編纂過程が判明する丹後田辺藩を中心に、全国の孝子褒賞史料を対象とし、「近世孝子褒賞史料・刑罰記録にみる障害表現　── 乱心・不平気・気分不揃 ──」をまとめ、障害史研究会編『障害史へのアプローチ』（障害史研究別冊、2024年３月）に掲載した。

○平田　勝政

研究分担者としてのテーマは「障害者の人権」である。最終年度となる2023年度は、コロナ禍で研究活動が大きく制約（とくに2020～2022年度の３年間）された中で進めた５年間の研究成果を、可能な限り論文にまとめる努力をした。その成果は、下記のとおりである。

①国民優生法と障害者の人権（第１報）「鎮西学院大学現代社会学部紀要」第22巻第１号，pp.37～44，2023年12月（単著）※査読（無）、オープンアクセス（有）

②国民優生法と障害者の人権（第２報）「鎮西学院大学地域総合研究所研究紀要」第22巻第１号，2024年３月発行予定（単著）※査読（無）、オープンアクセス（有）

③日本の優生学と障害者の人権 ── 知的障害を中心に ──、障害史研究別冊『障害史へのアプローチ』（2019～23年度科学研究費補助金基盤研究Ａ［19H00540］成果報告書）所収，2024年３月発行予定（単著）

とくに③は筆者の四半世紀に及ぶ研究成果を集約したもので、鎮西学院大学の定年退職最終講義（2024. 1. 29）において副題の「知的障害を中心に」を「糸賀一雄の福祉思想の歴史的意義」に変更して報告した。その他の成果として、下記の④がある。

④日本盲教育史研究の成果と課題 ── 1920年代における川本宇之介と希望社運動の検討 ──（日本盲教育史研究会『盲教育史百触の旅　盲史研10周年記念誌』所収，pp.140～149）2023年10月

○福田　安典

〔著書〕『江戸の実用書　ペット・園芸・くらしの本』（近衛典子・福田安典・宮本祐規子、ぺりかん社、2023年）

〔雑誌論文〕「園芸書の文芸性 ── 『花壇綱目』を中心に」（小峯和明編『日本と東アジアの〈環境文学〉』、2023年７月、査読なし、勉誠出版、pp109-118）

○藤本　誠

〔論文（単著）〕

１）「地方から都を往来する人びと ── 地方豪族層・運脚夫を中心として ──」（佐々木虔一・笹生衛・菊地照夫編『古代の交通と神々の景観 ── 港・坂・道 ──』八木書店、2023年５月、pp367-390）。

２）「摂関院政期における疾病（障害）表現の基礎的考察 ── 四肢の疾病・盲・皮膚疾患を中心として ──」（『障害史研究』５号、2024年３月、pp1-22）。

３）「日本古代の疾病（障害）表現の特質 ── 仏教関係史料を手がかりとして ──」（障害史研究会編『障害史へのアプローチ』（2019～23年度科研成果報告書・障害史研究別冊）、2024年３月、pp1-15）。

〔その他の業績〕

１）藤本誠編「中国仏教説話（六朝隋唐期）の疾病（障害）関係史料目録」（『障害史研究』６号（科学研究費基盤研究（A）「障害の歴史性に関する学際統合研究 ── 比較史的な日本観察 ──」）2024年３月）。

２）藤本誠編「古代日本仏教説話の疾病（障害）関係史料目録」（『障害史研究』６号（科学研究費基盤研究（A）「障害の歴史性に関する学際統合研究 ── 比較史的な日本観察 ──」）2024年３月）。

３）小山聡子・藤本誠・細井浩志編「日本古代・中世疾病 疾病観論文目録」（『障害史研究』６号（科学研究費基盤研究（A）「障害の歴史性に関する学際統合研究 ── 比較史的な日本観察 ──」）2024年３月）。

○細井　浩志

１　著作

(1) 共著

国立歴史民俗博物館編，陰陽師とは何者か ── うらない、まじない、こよみをつくる，全326頁（小さ子社，京都）2023年

２　学術論文

(1) 単著

１）法師陰陽師の実態とその歴史的性格，史学研究，315，14頁－38頁（広島史学研究会，広島）2023年

３　その他の業績

１）書評 関根淳著『日本古代史書研究』，歴史評論，877，83頁－87頁（歴史科学協議会，東京）2023年

２）国立歴史民俗博物館企画展　陰陽師とは何者か ── うらない、まじない、こよみをつくる，会期期間2023年10月３日～12月10日（展示プロジェクト委員として）

３）小山聡子・藤本誠・細井浩志編：日本古代・中世疾病 疾病観論文目録，障害史研究，６、掲載頁数未定（障害史研究会，福岡）2024年

○丸本　由美子

〔研究雑感〕

今日の「精神病」「狂気」に相当するような状態は、江戸時代の幕府法においては「乱心」や「乱気」と表現されている例が多くみられる。幕府の裁判事例集である『御仕置例類集』には、「老幼幷愚昧片輪等之部　愚昧片輪乱心之類」という編目も立てられ

ており、一般的な表現であったようである。さらには、飲酒による判断能力の低下、あるいは極端に感情的な――とくに、他者に対して攻撃的であったり迷惑をかける言動をとる状態を「酒狂」や「酔狂」と表現する例も見受けられる。

翻って藩の事例を見渡せば――ここで、「藩」を筆者の主たる住処である加賀藩とすることをお許しいただきたい――やはり、これらの用語は文献の性質を問わず用いられている。刑法犯に対する処罰・対処の記録をまとめた『舊條記』には、「乱心」「酒狂人」が独立した編目名として採用されているほか、それ以外の編目に配置されている事案の中でも、事件関係者について「乱心にて自害」といったように行動が語られたりもする（日置謙校訂、石川県図書館協会、昭和８年、124頁）。これを「公」的な文書での使用例とするならば、「私」的な文書での例として、『寝覚の蛍』（日置謙校訂、石川県図書館協会、昭和６年）でのそれを挙げることができる。

同書は、著者がその生涯において見聞きした重大事件――風水害、火事、地震、疫病の流行といった影響範囲の広いものから、殺人、傷害、行方不明などの事件で人々の話題になったものまで――を書き留めた記録であるが、中に「酔狂人」が重要な役を演じたエピソードがある（30頁）。享和２年５月の小雨の日、酔狂した男が通りすがりの女にしつこく絡んだ挙句、殴りかかったところを「腕を引かついて橋の下へ打込」まれ、折からの降雨で増水した流れ（なお、橋が「右衛門橋」とされているので、男が放り込まれた川は鞍月用水であることがわかる。現在も繁華街・香林坊を抜けて人々に親しまれる用水路である）に翻弄されてようよう這い上がったときには、女は「悠々と行去」っていた、というものである。見事なやられ役である酔狂した男は「安房守殿の先供」、鮮やかにそれを撃退した女は「青山将監殿の奥女中なりとかや」と記されている。酒狂・酔狂の粗暴犯に関わる記録は、殺人、暴行傷害、器物損壊などのうんざりするものが非常に多いなか、いっそ爽快な気分になる事例として、非常に印象深いものであった。

○山下　麻衣

山下麻衣「戦後復興期・高度経済成長期における付添婦の存続理由に関する研究――神奈川県を事例として」『経営史学』第58巻第１号、2023年６月、27-51頁。

本論文の目的は、戦後復興期および高度経済成長期において、神奈川県で看護婦家政婦紹介所を経営していた女性の特徴、同所の労働需給調整方法に注目して、付添婦の存続理由を明らかにする点にあった。

本論文においては、職業としての付添婦は、私立病院および開業医と経営者との間の長年の人的コネクション、および、経営者が持つ成り手としての中高年女性を開拓する手腕と能力によって、戦後も残存したことを見出した。

加えて、付添婦は、慢性的な看護職不足を長年補ってきた女性を構成員とする無償労働としての「家族」の代替者であったという点についても言及した。

○山田　嚴子

〈研究業績〉

ⅰ、論文

山田嚴子・原　克昭・羽渕一代「大学生の「俗信」的知識と実践」弘前大学人文社会科学部『人文社会科学論叢』第15号（2023年８月）１～24頁。

大学生の「俗信」的知識を量的調査して、必ずしも信じていないものの行為や不行為を導くものとその「知識」量の地域性を考察したもの。「丙午生まれの女性」など出産と関わる「知識」も考察されている。（査読有）

ⅱ、その他

山田嚴子「シンポジウム　危機のフォークロアと〈口承〉文化　趣旨説明」日本口承文芸学会編『口承文芸研究』46号（2024年３月）160-163頁

2023年３月18日に行われたシンポジウムの趣旨説明。「危機の際にとっさに現れるフォークロア的なもの」の諸相を議論した。

〈研究短報〉

民間宗教者としてとらえられてきたイタコやオガミサマの「副業」に着目し、視覚障碍者の生業の全体像をとらえるためのデータ収集を行った。

○山本　聡美

・著書

『増補カラー版 九相図をよむ　朽ちてゆく死体の美術史』（KADOKAWA、2023年７月）

・論文

「愛執と闘諍の図像 ── 中世文学と仏教説話画 ── 」（『中世文学』68、2023年６月）

・コラム（図録解説など）

「美の十選 声がきこえる（1）～（10）」（『日本経済新聞朝刊』、2023年６月）

「魑魅魍魎、廃墟にあらわる！」（神奈川県立金沢文庫『廃墟とイメージ ── 憧憬、復興、文化の生成の場としての廃墟 ── 』、2023年９月）

「ほとけの言葉と造形」（世田谷区立郷土資料館『館蔵品でみる 宗教美術の造形 ── 仏教美術を中心に ── 』、2023年10月）

○吉田　洋一

令和６年３月刊行予定、吉田洋一、『（仮）肥前島原松平文庫所蔵資料目録（2）』、平成30年度から令和５年度まで通計26回の現地共同調査（史料点数約20,000点）の成果報告書。「医学・薬学」関連資料の解題を担当した。